

安倍「国葬」は何を明らかにしたか

村岡到 9月28日



九月二七日、東京千代田区の日本武道館で元首相安倍晋三の「国葬」が強行され、戦後史に汚点を残すことになった。安倍元首相は、七月八日に元統一協会への恨みに機縁して殺害された。「国葬」は、一九六七年の元首相吉田茂いらい五五年ぶりである。

「国葬」には海外要人約六〇〇人を含む約四一〇〇人が参列した。争議委員長は岸田文雄首相。近くの公園に一般献花台が設置され、長蛇の列が夕方遅くまで並んだ。弔意を表する参加者は約二万三〇〇〇人。他方、武道館周辺や国会前、日比谷公園などでは国葬に反対する市民の集会・デモが展開された。全国各地でも集会・デモ。国会前では一万五〇〇〇人が結集した。

第一に何よりも強調しなくてはならないことは、この国葬は、何の法律的根拠も無く、さらに国会を無視して岸田政権によって強行されたことである。「主権在民」を根本原理とする日本の民主政の根本を蹂躪する暴挙である。岸田首相は、安倍殺害の六日後には「国葬儀」とすると語り、七月二二日に閣議決定した。岸田首相は、九月八日に国会の閉会中審査に出席して「説明」したが、国会は開かなかった。岸田首相の独断と言える。

第二に、この国葬に反対する声が国民の過半数を超えたことである。直前の世論調査では反対：五七％、賛成：二二％だった（NHK）。反対の理由や根拠は後述のようにさまざまであるが、時の政権が施行する施策に過半数の国民が反対の意志を表明することはきわめて稀である。その意味では、日本国民は健全であると評価できる。反対する集会やデモも禁圧されることはない（ロシアの現状と比較せよ）。このことは、日本の民主政を育てるための基礎として重視しなくてはならない。反対運動が広範に展開されたからこそ、岸田政権は半旗掲揚や弔意表明を地方自治体などに強制できなくなったのである。反対集会やデモに参加した市民は、自身の行動が無駄であったと諦めるのではなく、体験を広げ、政治参加の機運を高めるように働きかけを続けよう。

もちろん、この国民多数の反対の意志を無視して国葬が強行されたことは大問題である（だから第一に上げた）。だから、マスコミも「世論分断」とか「賛否交錯」と大きく報道した。反対の理由は、決定過程の乱暴さ、法律的根拠の不在、憲法違反、安倍評価、税金の無駄使い、などさまざまである。なお、内閣府は約六〇〇〇人に案内状を送付したが、出席の連絡があったのは約三六〇〇人＝六割だった。

また、自民党の村上誠一郎・元行政改革大臣は九月二〇日に、「国葬」に反対し、欠席すると明らかにした（「赤旗」でも大きく取り上げるべきである）。

第三に、この国葬は法律的根拠を欠くばかりではなく、憲法第一四条の「法の下での平等」や第一九条の「思想・信条の自由」に違反する。人間は生まれた時から〈平等〉であり、〈平等〉をめざして生きなくてはならない。また何人にも〈思想・信条の自由〉が保障されなくてはならない。誰かを尊敬したり、否定的に評価するかは各人の自由である(無根拠な誹謗は下品であり控えるべきであるが)。国家が特定の故人の人格を特別に顕彰することはしてはならない(個別の業績を顕彰することはありうる)。

第四に、安倍元首相の業績評価については、首相在任期間が八年八カ月の長期にわたる事実はあるが、二〇一五年の安保法制の改悪や森友学園をめぐる公文書改ざんや加計学園問題、「桜を見る会」問題などは、断罪されなくてはならない。拙速に当面する政局のためにプラス評価だけを強調することは大きな誤りである。「国葬」で紹介された安倍の足跡では、二七回も会談したロシアのプーチンは出てこなかった(前記の吉田茂の場合には、死後一三年となり、国会や与党にも配慮した)。

第五に、安倍元首相が祖父いらい三代(岸信介、安倍晋太郎)にわたって懇意にしてきた元統一協会との深い癒着を徹底的に切開する必要がある。この問題については、来月三日に始まる臨時国会でも大きな問題になるが、別に明らかにしなくてはならない。

第六に、「国葬」には巨額の経費がかかり、それは税金から支出される。岸田政府は当初は二・五億円としていたが、九月六日には一六・六億円に変えた。警備費を加算すれば一〇〇億円という試算もある。いずれ明確になるだろうが、国費の無駄使いと言うしかない。自然災害や経済逼迫による貧困救済に廻すべきである。

第七に、「国葬」に際しての警察による警備体制の問題もある。今回は、警察庁によると、警視庁から一万七五〇〇人、全国の警察から「特別派遣部隊」が約二五〇〇人の計二万人の警官が動員され、特別に「警備対策推進室」が設置され、都内の交通規制が広範囲に実施される。その経費は不明だが、今後、警察関係の予算増加やネットでの通信規制・傍受などの強化が強く懸念される。

第八に、「弔問外交」なるものがプラスとして宣伝されたが、G7では首脳の参加はなく、取り立てるに値する成果があったわけではない。

第九に、安倍国葬後の政局はどうなるのか。自民党では九七人を束ねる「安倍派」はボスを失い、分散・解体が予測され、派閥構造が流動する可能性が高い。岸田政権は、コロナ禍、円安による経済不況の拡大、ロシアによるウクライナ侵略による国際政治構造の変化、などに直面している。岸田首相は、九月二五日に公明党の党大会での挨拶で、「日本は戦後最大級の難局」と語った。国政選挙が実施されない「黄金の三年間」などと言われていたが、岸田首相の前途はきわめて多難である。週刊誌では「統一教会 “絶縁、解散なら自民67議席減・衝撃データ”」なる記事まで出されている(『週刊ポスト』一〇月七日号)。

来月三日に始まる臨時国会では、前記のように自民党と元統一協会との深い癒着について徹底的に切開する必要がある。九月二六日に立憲民主党と共産党は臨時国会にむけて共闘すると合意した。その五日前には立憲民主党は〈準与党〉たる日本維新の会と共闘すると「合意書」を交わしていた(なお、立憲民主党の元首相野田佳彦氏は「国葬」に参列した)。立憲民主党はふらつくことなく、岸田政権への徹底した批判と合わせて、政権を奪取するための〈政権構想〉の内実を明らかにしなくてはならない。共産党は〈閣外協力〉と〈政権構想〉を明示する必要がある。

そもそも「国葬」は戦前、明治憲法下においては、国民統合のために国葬令に依拠して行われてきたもので、国葬令は、敗戦後一九四七年五月の日本国憲法施行とともに効力を失った。私たちは、前記の第三に指摘した立場に立つがゆえに「国葬」を設置すること自体に反対である。

付随的ではあるが、「国葬」での前首相菅義偉氏の弔辞は心を打つものであった。特に岡義武著『山県有朋』からの山県有朋の短歌の引用は興味深い。もちろん、彼が安倍政権で官房長官を長く務めた時期の政治責任が帳消しされるわけではない。

なお、私を代表とする社会構想探究グループは九月一九日に「安倍元首相の国葬に反対する声明」を発表した(ネットで公開)。

牧子氏に答える:

村岡到 10月2日

私が、九月二八日にアップした「安倍『国葬』は何を明らかにしたか」に対して、牧子嘉丸氏がレーザーネットで「そんなに菅の弔辞は心を打ちましたか？」と問題にしている(九月三〇日、前日にも)。

私からすれば、「何をそれほど問題にするの？」と言うしかない。私は「心を打つもの」と書いただけで、「深く」とか「大きく」とか形容句を付したわけではない。

そもそも私の一文は、冒頭の一句で「安倍『国葬』は戦後史に汚点を残すことになった」と結論している。「二〇一五年の安保法制の改悪……などは、断罪されなくてはならない」とも明記している。かつ、菅義偉氏に触れた末尾の一筆は、「付随的ではあるが」とし、「もちろん、彼が安倍政権で官房長官を長く務めた時期の政治責任が帳消しされるわけではない」と締めくくっている。

だが、牧子氏はこれらの点については、一言も触れない。

私はいつも書いているように、「坊主憎けりや袈裟まで憎い」という思考法が嫌いで、哲学者の梅本克己に習って、物事の肯定面と否定面を包括的に理解することを心がけているだけである。

「坊

主憎けりや袈裟まで憎い」はダメだと聞いて、伝染病に掛かった人を手当する医師の衣服まで着るのか、などと反発する人はいないであろう。

こんな話題よりも、「国葬」で自衛隊の儀仗隊が参列し、式典の黙禱時に「国の鎮め」という、ほとんど聞いたことがない曲が陸上自衛隊中央音楽隊によって演奏され、天皇の代理による供花の際に「悠遠なる皇御国(すめらみくに)」が演奏されたことを、指摘できなかったことを深く反省したい。前者は明治時代からの軍歌、後者は二〇一九年に作られ二〇年一〇月に「陸上自衛隊西部方面隊創隊65周年記念演奏会」で演奏された曲である。なお、「国葬」では、安倍元首相が自らピアノ演奏する「花は咲く」で始められた。

また、前記の拙論では、安倍「国葬」に対する海外の反響はどうであったか、という視点も欠落していた。

安倍「国葬」に反対する人のなかに、菅氏の弔辞に心を動かす人がいるなどと「驚く？ 嘆く？」よりも、菅氏の弔辞に心を動かす人のなかに安倍「国葬」に反対する声を広げるほうが意味があるに違いない。反対を絶叫するのではなく、反対の声を広げるほうが大切だと、私は考える。

なお、昨日「東京新聞」が菅氏の弔辞を大きく批判的に取り上げた。そこで佐高信氏が山県有朋の死に際して石橋湛山が「死もまた社会奉仕」と皮肉ったことを菅氏は「知らなかったのか」と批判している。私はこのことは初めて知ったが、首相になる人が不可欠に知っていなくてはならないほど重大でかつ周知の事実なのであろうか。私はこのようなオーバーな「批判」は書くべきではないと考える。「知らなかったのか」と批判するのではなく、湛山はこのように評した、とだけ書けばよい。岡義武は『山県有朋』で山県をどのように評価しているのか、知りたくなった。安倍の読書傾向や、同書には他のどのような部分にマーカーペンで線を引いていたのか、そこまで知ることは出来ないのは残念だ。